

## 2026/2/8「主の後に続け」詩編23

交読文・エフェソ1:17-23 さ354 せ201 (160)

創立80周年の記念礼拝の朝を迎えました。敬愛する先生方、兄弟姉妹と共に、この時を過ごせる事を、心から感謝いたします。これからの100年に向けて、主の後に続きましょう！

恵みと慈しみを感じる

詩編23編は、CS教案誌の日課で昨年最後の礼拝に選ばれた箇所でした。また、9月のひばりさんの暗唱聖句でした。そして、同じ月に、織田志のぶ姉が天に召され、織田義郎兄直筆の詩編23編が飾られました。ご葬儀の後駆けつけた、九州アシュラムでは「主は我が牧者、ハレルヤ」という賛美が響き、帰ってきた16日の早天のアパ・ルームの箇所が、やはり、この23編でした。子どもたちでも暗唱できる、主の祈りに次いで有名な「詩篇の真珠」（英国説教者スポルジョン談）を、ぜひ皆さんも暗唱しましょう。

その23編の中でも、神様が力強く示してくださったのは、恵みと慈しみが、いつも私を追う。という箇所です。このスピリットは「たとえ私が愚かであっても、神さまが私を見捨てず、連れ戻してくださる」という信頼です。そして「あらゆる混乱の中にあっても、最終的には、主が良いことを起こしてくださる」という希望です。

かつて、この恵みと慈しみを、ヘブライ語のトーブ(最善/恵み)とヘセド(愛/慈しみ)という名前の、二匹の牧羊犬に例えて、父が説教していたことを思い出します。この二匹が、いつも私を追いかけてきてくれる、幸いな人生のイメージを教えてくださいました。365日、私たちには、この羊飼いである主の忠犬、トーブとヘセドが一緒です。私たちを連れ出し、自分の思いとは逆の方に連れてゆくとともに、それに従うべきなのは、私たちの方なのです。

主の後に続く

年頭に『羊飼いが見た詩篇23篇』（フィリップ・ケラー）をお勧めしました。羊飼いという職業の苦勞を知る牧師が、実体験をもとにしたリアルな信仰を語っています。

羊は、誤った管理の元では、最も破壊的な家畜となりうるそうです。つまり、大食漢で牧草を食い尽くしてしまう生き物だという意味です。しかし一方で、羊の堆肥は植物にとって大変有益で、羊毛も取れるし、いざとなれば食肉にもなり、正しく管理されれば「金のひづめ」と呼ばれる、富と益をもたらすということでした。明暗を分けるカギは「絶えず羊飼いが、群れを新しい場所に移動させ続ける」ことです。

あふれる恵みと慈しみを受けた者は、だからこそ、その状態から、また新たなステージに移されるのです。それを分かち合う方法を考えるようになるのが、人生の醍醐味です。

「良い人々は彼らの後で生きる」（テニスン）— 私たちが後に残すのは、祝福でしょうか、呪いでしょうか。私の生涯は人々にとって喜びでしょうか、痛みでしょうか。羊が、破壊と富を、どちらも生み出せるように、私たちも、ギブアンドテイクの選択によって、その後に残していくものを変えることができます。教会もまた然り、ではないでしょうか。

詩編23編は、いつも私たちと共にあります。でも、この「あたりまえ」を知らない人々が世界中に多くいます。私たちは、その死の影の地に住んでいると感じているような人々に、祝福と喜びを、残してゆく、そんな一年を、これからの日々を、歩みましょう。

80周年を祝うのは、新しい牧場へ出発の合図です。何よりもまず、私たちが、この恵みと慈しみを、心ゆくまで味わい、喜び、感謝しましょう。そして、新たに迎える、素晴らしい佐々木良子先生と共に、伝道と奉仕のわざに励む決意をいたしましょう。